
あたしと鬼と幽霊と

麻由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしと鬼と幽霊と

【Nコード】

N2633D

【作者名】

麻由

【あらすじ】

小さい頃から幽霊が見える。見えるだけじゃなく話すことだって。そんなあたしのひそかな職業は、幽霊がらみの悩みを解決してあげることだ。でも、今度の依頼はいつもと少し違うみたい・・・

ブローグ

目の前には果てしない闇が続いている。

あたしは制服姿で一人立ち尽くしていた。

後ろからこれまでにないような殺気を感じる。

あいつが追ってきているのだ。

あたしの息の根を止めるために。

逃げようと必死に足をバタバタと動かす。

でも今回もやっぱり、夢の中にありがちなスローモーション。

全力疾走しているはずの足は、のろのろと虚しく空をきつた。

体が逃げると悲鳴をあげている。

わかってる、わかってるのに体が言うことを聞かない。

『どこまで逃げる気だ？お嬢さん』

耳元であいつがささやいた。

ぞくりと背筋に恐怖が走る。

いつの間にか、あいつはすぐうしろに追いついていた。

震える息をか細く吐き出しながらおそろおそろ振り返ると、突然大きな手で頭をつかまれ、あたしの足は地面から離れた。

あいつの指が頭を締めつけ、爪が食い込むを感じた。

頭が割れるような痛みの中で、あたしは薄く目を開けてあいつを見た。

はつきりした顔はわからない。

人であるかさえも。

人間のような姿かたちなのに、頭からは2本の角。

欲望で血走った眼は、本物の血なんかよりずっと鮮やかな赤。

あいつは口元をゆがめ、残忍な笑みを浮かべた。

開いた口から獣のように鋭い牙が覗く。

あいつにとってあたしは獲物なのだ。

殺しの欲求を満たすための。

あいつは右手をゆっくり持ち上げ、ナイフのような5本の爪をあたしに向けた。

もうすぐあれがあたしを八つ裂きにする。

あの凶器からはきつと逃げ切れない。

体を堅くし、痛いほどきつく目をつぶる。

あいつの勝利の高笑いとともに、焼け付くような痛みが体を貫いた。悲鳴をあげる暇もなく、次の痛みが襲う。

叫ぼうとした喉も引き裂かれる。

なまあたにかいものが体を伝う感触を最後に、意識は遠のいていく。

死ぬならそれでいい。死んでこの痛みから解放されたい。

早く

早く終わらせて

第1話：寺の少女の朝（前書き）

はじめまして。この小説を開いてくださって、本当にありがとうございます。ざいます。作者はまだ16歳で、大人の方の小説と比べると文章が荒削りで読んでいて未熟に感じるかもしれませんが…。日々常に作者の頭の中に描かれている物語をできるだけ忠実に綴っていかうと思つてます。少しでもおもしろいと感じてくださつた方、どうか最後までお付き合いいただけたら幸いです。

第1話：寺の少女の朝

ぱつと目を開いた。上に漬物石でも乗っかってるみたいに胸が苦しい。

パジャマも額も汗でぐっしょりだ。あたしは張り付いた前髪を指でそつと分けた。

またあの夢だ。

最後に見たのは一週間前だった。もうこないと思って安心したのがそもそも間違いだった。

かんべんしてよ、月曜日の朝から殺される夢なんて。

あたしはため息をつくと再び布団にもぐりこんだ。目覚めるならもうちょっとマシな夢で目覚めたい。

「まーやー！起きろ爆睡女ー！！」

一階から弟の声がガンガン響いてくる。悪夢でうなされていた姉への気遣いはかけらもない。

「あーもうっさい！起きてるってば！」

かなり刺々しい口調で叫び返すと、のろのろとベッドから降りた。

まるであいつがまだ頭を締め付けているみたいだ。

何度が壁に激突しそうになりながら、ふらふらとキッチンにたどり着くと、家族はすでに朝ご飯を終えていた。

弟の圭太はけいた口笛吹きながらお皿を片付けている。お世辞にもうまいとは言えない。

黒い学ランに、ワックスで髪をツンツン立てた弟は、あたしを見るとにやにや笑った。

「いつまでぐーぐー寝てんだよ。ほんっと、起こすのも一苦労だな」
つたく、中坊のぶんざいで生意気なやつだ。

「えーえー、ほんっと、あんたの馬鹿でかい声のおかげで快適な目
覚めでしたわ、圭太様」

とびつきり美しい声でそう言つと、圭太はおえつと吐く真似をしな
がらキッチンから出ていった。

あたしは冷めたご飯と味噌汁を口にかきこんで、制服に着替えた。
制服を見るとさっきの夢がまたよみがえってくる。これが真つ赤な
血にまみれて…

ぶんぶんと頭を振って振り払う。だめ、考えちゃだめだ。
かばんの紐を引っつかんでローファーをはき、家を出た。

自転車の止めてある庭まで歩いて来ると、おじいちゃんはよれよれ
のパジャマ姿で寺の庭を掃除していた。

ラクダ色の腹巻きまで装着している。おじいちゃんのセンスの良さ
なんて、すでによく知っている。

「おじいちゃんっ」

坊主頭がぴくつと反応し、こっちを向いた。

「なんだ万夜、また寝坊か」

おじいちゃんはにんまりと笑った。

あたしの大好きなその笑顔はたくさんしのしのせいでより柔らかく
見える。

ちょっとだらしないところもあるけど、お父さんが死んだあと、あ
たしたちを男手ひとつで育ててくれた頼もしいおじいちゃんだ。

あとはお坊さんらしく正装してくれさえすれば完璧。せめてラ
クダ色以外で。

「あのさーおじいちゃん、その腹巻き…」

「これか？いいだろう。あつたかくてな、すぐれものだぞ」

おじいちゃんは腹巻きをつまんであたしに見せてきた。

するとおじいちゃんは何か思い出した様な顔をした。

「そういえば、今朝女の人から電話があつたぞ。夕方、よろしくお願いしますとか何とか」

ぎくり。

「あ…ああゝ女の人ね？ええと、なんて言うか…」

おじいちゃんの目付きが鋭くなる。これはまずい。

「…お前まさかまた」「いつ行つてきまーす!」

あたしは止めてあつた自転車にまたがると、寺の門から飛び出していった。

第2話

あたしはブレーキを軽く握りながら、坂道をのろのろ下っていった。

ふうーっ危ないとこだった。

とりあえず助かったものの、今日帰ったらおじいちゃんあたしをこっぴどく叱るだろう。つるぴかの額に青筋を立ててわめくおじいちゃんを想像した。

あたしは俗に言う、「見える」体質だ。さらに言うと、どつかの霊能者みたいにお経を唱えたり枝を振り回さなくても、それらと話すことができる。

おかげで周りからはいつも注目の的だった。「問題児」として。何度病院に引っ張って行かれたか、両手じゃ足りないくらいだ。

おじいちゃんは断固として認めてくれない。そもそも幽霊とか非科学的なものを信じない人種だから。けど、あたしはこの仕事をけっこう気に入っている。

その仕事って言うのが、幽霊のお悩み相談所みたいな感じ。

ただし、お金がもらえるわけじゃない。ほとんどボランティアみたいなものだ。

唯一の報酬は、ときどきちよっぴり感動をわけてもらえるってだけ。あとはもう、困難と危険の繰り返しだ。

「おい小娘」

「ぎゃっ！」

突然の声に、あたしはブレーキを緩めてしまった。自転車はすぐにスピードを上げ、坂道を滑り降りていく。

まずい、このままじゃ植え込みに突っ込んでしまっ

しかし自転車は急停止した。「自転車」は。

おしりが浮き上がり自転車から放り出されそうになったのを、自力でドスン！とサドルまで戻ってきた。

「助かっただろ？」

辺りを見回しても誰もいない。それもそのはず、声の主はあたしの真上に浮かんでいたから。

その幽霊は、あぐらをかいてあたしを見下ろしていた。自転車が急停止したのもこいつの仕業だ。

いたずらっ子のようなそばかすがある顔は、にやにや笑っている。

あたしがみつともない格好をしたのがおもしろくてたまらないらしい。

「げっ、義将よしまさ……」

「なんだよ。またチコクか？」

「わかってるならこういうことしないだよ」

「おかげで速く下れただろ」

あたしは無視して自転車を押して歩くことにした。さすがに乗る気にはなれない。

義将はふわふわとついてきた。

普通幽霊っていうのは、生きてる人との関わりを持とうとしない。

まして、登校中の多忙な女子高生に声をかけて植え込みに突っ込ませようとするなんて、もってのほかだ。

長いもので、こいつとは3歳のときからの付き合いだ。あたしが幽霊と話せることを知って、それからことあるごとに姿を現して、気軽に話しかけてくる物好きな幽霊。

だいたい、そろそろ人通りも多くなってきたっていうのに幽霊と会

話なんかしていたら

間違はなく警察が病院行きだ。

周りの人には、一人でしゃべってるあたししか見えないのだから。

歩く足を止めると、息を吸い込んだ。

「あのね義将。一人でしゃべるのは勝手だけどあたしに話しかけないで。周りから見たら、あたしはぶつぶつひとり言いながら歩いてるように見えるんだから！」

あたしはできる限り小さい声で、早口にまくしたてた。

義将はむすつと不機嫌な顔をした。

「ちえー、つまんねえな」

義将は唇をとがらせて、すうつと消えて行った。やれやれ、おっぱらうのにも一苦労だ。

あたしは自転車にまたがり、学校へ急いだ。

第3話：解決屋の仕事

学校はいつも通り、何事もなく終わった。

あたしはチャイムと同時に教室を飛び出すと、隣り町の依頼者の家に向かった。

今日のお宅は最近建てばかりらしい。オレンジの屋根で、いかにも少女趣味って感じた。

ぜったい新婚さんだ。

呼び鈴を鳴らすと、中からブリブリのエプロンをつけた女の人が出てきた。メイクが…濃い。

「あらあゝ！あなたが幽霊の退治屋さんなの？まだ学生さんじゃない！」

「はい」そうですが何か。

「そうなの？なんだか意外だわあ…まつ、とりあえずあがつてちょうだい」

家の中はレースとピンクの世界だった。壁にもカーテンにも、今はいているスリッパにも、レースレースレース。

目がレースで侵されてしまいそう。住んでて平気なんだろうか。

女の人が依頼の内容を説明しているのを、あたしは砂糖水のような紅茶をすすりながら聞いた。

なんでも、時々家の中で廊下を走り回る音がするという。他にも、閉めたはずの戸が開いていたり、物が倒れたりするらしい。

「ぜったい、あたしが前飼ってた猫のケティちゃんだと思っのよ！」

ダーリンと新しく引っ越してから死んじゃったんだけど…慣れない
おうちで疲れちゃったのかしら」

はいはい、ケティちゃんね。

もっと深刻なのかと思ったら猫探しだなんて。何だかアホらしく
なってくる。でも仕事は仕事だ。

「わかりました。とりあえず、家を調べてみます」

あたしはそのあと、家の中を歩いてみた。部屋を一つずつ、くまなく
チェックしていくけれど、特に変わったところはないみたいだ。

すると、テレビの上に立てかけてある3つの写真が目に入った。

一番左の写真には、さっきの奥さんと旦那さん。青空ときらきらし
た海をバックに、幸せそうに寄り添っている。きっと新婚旅行の写
真だとあたしは思った。

真ん中は少女と小さい男の子が写った古い写真。少女はたぶん奥さ
んだ。子供の頃の写真だろう。

そして最後のは、ぶよぶよに太った白いネコが写っている。これが
ケティちゃん。

こんなに大きけりやすぐ見つかるんじゃないだろうか。

「ケティちゃん、ほおら出ておいで、ケティちゃん…」とつぶやき
ながら部屋を行ったりきたりして、出てくるのを待った。

しーんとした家に、あたしのケティちゃんを探す声だけが響く。

猫は一向に姿を見せないまま、30分が経った。

もうっ、どうなってんのよ！

あたしは途方にくれて、ぐしゃぐしゃと髪をかきまぜた。すると、

かたん

と、かすかに奥の部屋で物音がした。奥さんはキッチンにいるはずだし、何よりその部屋はまだチェックしていない。あたしの頭にピーンと光が差した。

ビンゴだ。

あたしは、奥の戸をガラツと勢いよく開けた。

思ったとおり、幽霊はそこにいた。驚いた様子で部屋の隅からこつちを見ている。

ただ、そこにいたのは猫じゃない。

小学生くらいの男の子だった。

あたしは目を見開いた。

「あ…あなたがいつも物音をさせてる幽霊なの？」

「誰？」

男の子は少し警戒気味に言った。

あたしはちよつとほつとしていた。人間なら話は早い。

「怖がらないで。あなたに何かしようってつもりじゃないから。ただ、この家の人が不安がってるから、できれば住みかを変えてほしいの」

男の子はびっくりした顔をした。

『お姉ちゃん、僕が見えるの…？』

あたしは微笑んだ。

「だって、こうして話してるでしょ？」

男の子は信じられないって顔でじつと動かなかった。

そしてしばらく考え込んだ末、男の子はゆっくりとあたしの前まで出てきた。

『…不安がるって、ここに住んでる女の人も？』

「そうよ」

そう答えると、男の子は悲しい顔になった。あわてているようにも見える。

ぐつと下に視線を落とし、やがてぽつりとつぶやくように言った。

『不安なんて…そんなつもりじゃなかったんだ。僕はただこの家の女の人に…姉さんに気付いて欲しかったんだ』

あたしはびっくりして目を見開いた。

「あなた…あの人の弟だったの？」

男の子はこくりとうなずいた。そういえばこの子、さっきの写真の男の子に似てる気がする。

「何で…気づいてほしかったの？」

男の子は押し殺した声で語りだした。

『僕、8歳の時に死んだんだ。交通事故で。姉さんは僕が死んで、すごく泣いてた…。本当に病気になるんじゃないかってくらい、すごく悲しんで…放っておけなかったんだ。』

だからずっとそばにいて見守ってた。でも姉さんはだんだん元気になって、大人になって、みんなにお祝いされながら結婚した。僕だつてみんなと同じように姉さんの結婚を本当に喜んでるし、姉さんにおめでとぅって伝えたい。

でも…』

男の子は肩をすくめた。

『これじゃあ気付いてもらえないよね』
あたしは何も言えなかった。

『それに…もう僕のことなんか忘れちゃったのかもしれないし』
あたしはいつの間にか涙ぐんでいた。まばたきをして、男の子の頭をそつとなでる。

その手には何の感覚も伝わってこないけれど、不思議と温かった。
『そんなこと、絶対ないよ』

男の子の目をじっと覗き込んで言う。

「お姉さんには…あたしから伝えておくから。あなたに代わって」

『本当…？』

黒い目にきらきらと光がさした。あたしはすっかりとうなずく。

「ほんとっ」

男の子は嬉しそうににっこり笑った。

『ありがとう』

その笑顔が、あたたかな金色の光に包まれていく。逝く時が来たのだ。

男の子はまばゆい光の中で言った。

『あと…姉さん、あんな人だけど気を悪くしないで。本当はすごく優しい人なんだ』

その言葉に、あたしは顔を赤らめて首をすくめた。

男の子は最後ににこつと笑うと、一筋の金色の光になり、天井を突き抜け空へと昇っていった。

第4話

キッチンに戻つてくると、女の方は頼杖をついてぼんやり外を眺めていた。憂いを浮かべた顔はさつきとは別人みたい。

あたしがぱたりとドアを閉めると、奥さんは顔を上げた。

「あら…もう終わったのね」

そう言つてにつこりと笑つた。その笑顔は、あの男の子にそっくりだ。

「何か、考え事してたんですか？」

女の方は、また窓の外に視線を移す。

「ええ…ちよつと、死んだ弟のことをね」

「えっ？」

あたしは思わず、女の方に歩み寄っていた。

「どんなことを？」

奥さんはあたしを見てにこつと微笑んだ。

「大したことじゃないのよ？ただ、私が結婚したってことを知ったら喜んでくれたかしら…ってね」

「…。」

「弟が死んだとき…本当に悪夢みたいだった…。あたしが夕飯の買い物押し付けて、その帰り道にトラックにひかれたの」

奥さんの手が小さく震えているのがわかった。

「あの子…文句を言いながらも買いに行ってくれたわ。そのあと事故に逢うとも知らないで…」

まだ、ほんの小学生だった…。私が行かせたせいで…私のせいで死んだの」

あたしは違つて言つてあげたかった。でも、話を聞いてあげなくち

やと思つてぐつと飲み込んだ。

「私は自分を責めたわ。どうして…どうして行かせたのって。あたしが自分で買ひ物に行つていれば、弟は生きていたのに、ってね…。毎日悲しみと後悔でいっぱいだった。物も食べずに家に閉じこもつて…地獄のような日々だったわ」

あたしにはこの人が絶望の中で暮らす姿なんて、想像できなかった。「でも、このままじゃいけないって気づいたの。こんな私を見たら弟が悲しむ、って。その気持ちが心の支えになつて、今私はこうして生きているの」

奥さんはすつと顔を上げた。

「だから、弟に伝えたいの。私は今とっても幸せだから…安心して天国に行つてねって。」

…無理な話だけどね」

奥さんはふふふと笑つたけど、あたしは笑えなかった。

「それで、ケティちゃんはどうだった？」

言うのがためらわれたが、ゆっくり口を開く。

「あの…実は弟さんに…あたし伝えるように頼まれてきたんです。あなたに、『結婚おめでとう』って」

奥さんははつとした顔になった。立ち上がり、両手をあたしの肩に優しく置いた。手の震えがあたしの肩に伝わってくる。

「あの子が…そう言ったの？あなたに？」

あたしは奥さんの目をまっすぐ見つめた。大きな瞳は涙で潤み、今にもあふれ出しそうだった。

「はい」

あたしは微笑んでうなずいた。

奥さんはそれ以上何も聞かなかった。代わりにぼろぼろと涙をこぼした。

厚いメイクが流れていくのも気にせずに黙って泣いていた。

そして、あの子と同じ笑顔でにっこり微笑んだ。

「ありがとう…」

帰る頃にはとつぷり日が暮れていた。女の方はもうすっかり泣き止み、旦那さんも帰ってきて、あたしは吐き気がするほどのあついラブラブっぷりを見せつけられた。

でも、あたしはム力つかなかった。これが、この人が悲しみを乗り越えた先で掴んだ、幸せの形なのだと思ったから。

一仕事終えて体はくたくたに疲れていたけど、妙にぽかぽかした気持ちだった。

あたしの人を見る目もまだまだってことが判明したし。

オレンジの屋根の家を振り返る。

見送りに出て来てくれた女の人は、旦那さんの腕の中でにっこり微笑んでいる。

その幸せな夫婦に手を振り、あたしは我が家へ向かって自転車を飛ばした。

第5話：奇妙な依頼者

住宅に囲まれた帰り道は、人通りがほとんどなくなっていた。

真っ暗な道を電柱の街灯だけが道を照らしている。来るとき通った道なのに昼間とはまったく違う雰囲気だった。

ざわざわと冷たい風も吹いてきた。ひゅーっつと耳元で風が鳴る。

なんだか不気味だ。あたしの胸に不安が広がる。

さっさとうちに帰ろう。

あたしはマフラーに顔をうずめて、こぐ足を早めた。

とその時、

びゅーっ！と前から突風が吹き付けた。あまりの強さに、自転車はスピードを失い、あたしはよろけて足をついた。

風はあたしを吹き飛ばしそうな勢いでびゅーびゅー吹いたあと、しばらくして止んだ。

ふうー、もう安心だ。

閉じていた目をぱちぱちとしばたいて、顔を上げると…

なんとそこに、髪の毛の長い女が立っていた！

あたしはびっくりして飛び上がりそうになった。

『こんばんは』

その若い女性はそんなあたしにかまうことなく、すっと頭を下げた。な、なんだ…口裂け女とかじゃなかったのね…

そうわかってほっとしたが、あたしのときどきした心臓はまだ治まっていなかった。

ていうか、よく見るとこの人…幽霊だ。

女性は頭を上げてあたしを見つめた。あたしは今改めてその顔を見て気づいた。

すごく、きれいな人。しつとりした日本人らしい顔立ちで、真っ白い肌に長い黒髪が際立っている。しかし、その目はどこか虚ろで、何の感情も読み取れない。

『あなたが幽霊と話せるという、朝日奈万夜さんですね』

「はい、まあ…そうですね…」

かしこまった態度に、思わずまごついてしまう。

女性は事務的な口調で言った。

『あなたに、依頼をお願いしたいのです』

その言葉にあたしは内心驚いた。今までたくさんの依頼を受けてきたけれど、幽霊の方からお願いされるなんて一度もなかったからだ。

「は…はい、あたしに出来ることなら何でも」

そう言うと、女性の表情がちょっとだけ和らいだ。

「で、どんな依頼ですか？」

女性は少しためらってから言った。

『明日、あなたの学校に男がやってきます。その男と仲良くなり、私のもとへ連れて来て下さい』

…はい？

あまりに短かったので、あたしはすぐには理解できなかった。ていうか、依頼の意味がよくわからない。特に、その男と仲良くす

るつとそこが。

「あのー…連れて来るのはいいんですけど、何で…」

『詳しいことはまた後ほどご説明致します』

女性はけっこう強引にさえぎった。

『それでは、また…』

女性はそう一言残してすうつと消えていった。

あたしはぽかーんとして立ち尽くしていた。

つまり？明日学校に来る男と仲良くなつて？女性のもとに連れて来いと？

女性のもとつて言われても、出たり消えたりできるのに分かるはずないじゃないの！

あたしは道の真ん中で一人憤慨した。

それに男つたつて特徴もわからない。一つくらい教えてくれても良さそうなもんなのに。

自然に口からつぶやきがもれる。

「わけわかんない…」

『全くだな』

「・・・え!?!」

がばつと振り返る。

「あー！ー！つー！義将！ー！ー！」

『よっ』

今朝追っ払ったはずのそいつは、にかつと笑って片手をあげた。こっちはそんな穏やかな気分ではない。

「な、ななな何やってんのよ!」

『うーん、しいて言えば散歩してたら小娘が美女と話してたので…』

『声かけてみた！』そう言ってあたしの前にVサインを突き出した。あたしはツつこんであげる元気もない。

「あらそー…よかったわねー。じゃ、あたし帰るから」

あたしは深いため息をつく、のろのろと自転車にまたがった。

『なんかおもしろい話してたな、学校に来る男がどうか…』
こいつ…ちゃっかり聞いてるし。

『俺、今日からお前についてっちゃんおうかな』

・・・はっ！？「何で!!」

『だって何かおもしろそうだし』

こつちはちつともおもしろくないんですけどー。

あたしは不愉快な気分であめいた。

反抗してやりたかったが、もう今日はくたくただ。それにこいつはあたしがどんなにおっぱらっても勝手についてくるだろう。現に今までそうだったんだから。

消えたいときには勝手に消えるんだろうし。

なんだ、許したところでこれまでと大して変わらないじゃないかい。

「勝手にすればっ」

ふんと鼻を鳴らしてそう言うと、義将の顔がぱつと輝いた。
やれやれ、やっかいなやつと関わったものだ。

とりあえず、うちに帰ろう。もうかなり夜が更けていた。

第6話

やっと寺の庭にたどりついた。義将は庭の上空をぶんぶん飛び回ってはしゃいでいる。

まさか本気で家までついてくるとは…。その気力とヒマさに、もはやあきれるの域を超えている。はあっとため息をついた。

「言っとくけど！」

あたしはしゃちほこをつついていてる義将に叫んだ。

「へんな真似したらすぐに成仏してもらうからねっ」
やり方知らないけど。

義将は、はいはいと言うように手をひらひらさせた。絶対こいつ聞いてないな。

ほっという玄関の戸をガラガラと開けた。何だか暗い…何かが家の明かりをさえぎっている。

まさか……。おそろおそろ視線を上げてみる。

それは仁王立ちして行く手を阻むおじいちゃんだった。

「ほお…お仕事は楽しかったか？万夜…」

おじいちゃんは笑顔で言ったが、目が笑っていない。

「お…おじいちゃん…」

あたしはなんとか笑ってみせたが、かなり引きつっているに違いない。

「そっ、そりやあもう…楽し…」

「この馬ッ鹿娘がああああっつ！…！！！」

どかー！…ん！…と寺で爆発が起こった。山鳥が一斉にバサバサと森から飛び立った。

おじいちゃんはおたしを玄関に正座させ、ものすごい勢いでわめきだした。

あたしは気が遠くなるような説教を数時間聞かされたあと、目から火花が飛び散るようないたーいげんこつをお見舞いされた。

その夜、あたしは夕食抜きをくらって、死んだようにベッドに寝っころがっていた。ズキズキする頭にそつと手をやると、大きなたんこぶができている。
あんにやろう・・・

義将はさつきから部屋の真ん中にどつかと座っている。

『おまえんちの出迎えは変わってるな』
ほんつと、もうサイコーよ。

『さつきじいさんの部屋に行ったけどな、寝言でまだおまえのことしかってたぞ』

義将は笑いを含んだ声で言った。

「へー…」明日には忘れてますように。

ぐうつーとお腹が鳴った。ああ、お腹すいた…

その時、コンコンとドアを叩く音がした。

義将ははっとして、すぐに部屋の隅に移動した。

「万夜？起きてる？」

圭太の声だ。

「あー…うん、起きてる…」

あたしはうめくように返事をした。

ドアを開けて入ってきた圭太の手には、夕食がのったお盆があった。あたしは一気に気分が上がった。

「ほら、これでも食えよ」

圭太はちやぶ台に湯気の立つシチューを置いた。よだれが出るほどおいしそうだ。

「圭太…あんたってほんと最高!」

あたしは思わずベッドから降りて圭太に飛びついた。

「うわっよせって、きもい!」

ぱつと手を放したあとも、あつたかい気持ちでいっぱいだった。

あたしは、弟のたまに優しいところが大好きだ。

弟はよれたスウェットを直すと、いつものように目を輝かせた。

「…で。今日も聞かせてくれよ、依頼の話!」

あたしはあつたかいシチューで口をはふはふさせながら、今日の出来事を語った。

圭太はあたしの仕事話を聞くのが大好きらしい。つまらない話でも熱心に耳を傾けてくれる。

今日出会った姉弟の話が終わると、しみじみとした顔で言った。

「その人、これから幸せでいてほしいな…弟のためにも」

「いるよ、ぜつたいにね」

あたしが自信満々にうなずいてみせると、圭太は「ははっ」と笑った。

「ていうか、おじいちゃんもあんなに怒らなくてもいいのにね?ほんつと頑固なんだから…」

あたしはふんと鼻を鳴らして言った。

圭太はやれやれって顔をした。

「あのな…そういうお前もあんまり心配かけさせるなよ」

「心配!?これが?」

あたしはたんこぶを指さした。

「恥ずかしがつてんだよ、あれは。あの石頭が『よく帰ったな』なんて言うわけないだろ。万夜は知らないだろうけど、おじいちゃん、お前が帰ってくるまでそわそわして家中歩き回ってたんだぞ？何度も何度も『今何時だ？』って聞いちゃってさ」

圭太はくすつと笑った。

そんなおじいちゃん、あたしは見たことない。怒鳴っているところは嫌というほど見たけど。

あたしが幽霊の依頼に行くことを、心の中では心配していてくれたんだろうか。

だからいつもあたしに反対するのだろうか。

「…まっ、土産話を作ってきてくれるのはいいけど、ほどほどにな」
圭太はそう言つて立ち上がった。あたしは答えられなかった。

「じゃ、俺寝るわ。皿片付けといてくれよ」

「うん…」

パタリとドアが閉まった。義将が部屋の隅からゆっくり出てきた。

『いい家族だな』

あたしは義将に弱く笑った。

「でしょ？」

その夜は、ぐっすりと眠れた。

第7話

『…い、おい起きろ』

誰かが呼んでいる。まだ目を開けたくないのに。

『おい小娘、ぐっすり寝たのはいいけど寝過ぎじゃねーか？』

「寝…すぎ…ああっ…！」

がばつと起き上がった。

時計を見ると、8時をとくに過ぎていた。

「やつ、やばい！」

あたしは転げるようにベッドから出た。

義将は頭をぼりぼりかきながらあたしの慌てぶりを観察している。

「ちよつと義将！なにぼけつとしてんの、出てってよ」

『何で』

「きーがーえーるーの！」

そう言つと、義将はぶつぶつ言いながら壁の向こうに消えていった。

着替えを済ませて鏡の前に立つ。

げつ、ひどい寝癖だ。でも直している時間はない。

あたしはスプレーを大量に吹き付けて応急処置をした。

階段を駆け降りると、どんつと誰かにぶつかった。おじいちゃんだ。

「なんだ、起きたのか」

おじいちゃんはむすつとした顔で言った。でも、もう怒ってはいないみたいだ。

「うん」

ほんのちよつとだけ、気まずい空気が流れた。やがておじいちゃん

はうめくように口を開いた。

「お前がどんなことをやってるのかわしは知らんが…」

「おじいちゃん」

「？」

「ありがとね」

そう一言つぶやいて、キッチンを素通りして玄関に向かった。ご飯を食べてる時間はなさそうだ。

ドアを開けると、外は申し分ない晴れ空だった。

「さっ、急がなきゃ！」

あたしは学校に向けて自転車をこぎ出した。

義将もふわふわとついて来る。

『お前なんで笑ってるんだ？』

「別に」

今は無理でも、いつかきつと、おじいちゃんも誇りに思えるような孫になってみせる。

日本中、うつん、世界中の誰よりもすごい解決屋になってやるんだ。

景色はだんだん都会になっていく。人通りも多くなり、山なんて遠くにちよっぴり見えるだけだ。

やがてその中に、によっきりと背の高い建物が見えてきた。

その壁は色あせて、所々はがれている。あたしの通う高校だ。

県の重要文化財である旧校舎と並んでいても、ぼろぼろさなら決して負けていない。

『おおおーっ！見る小娘、おなごがいっぱいいるぞ！』

「はいはい」

義将はぞろぞろと校門をくぐっていく女子高生に大興奮している様子だ。

本当にこいつを連れてきてよかったのか？自分…

あたしは義将に小声でささやいた。

「いい？学校に入ったらあたしに話しかけちゃだめだからね」

義将は自信たつぷりといった顔をした。

『わかってるって。オレはそこからゆーっくり観察させてもらうかな』

そう言っ指さしたのは、あたしのケータイについているウサギのぬいぐるみだった。

「…え？どうやって？」

そうあたしが言うのと、義将は得意げな顔をして『ほっ！』とぬいぐるみに向かって飛び込んだ。

すると、義将の体はしゅるしゅると掃除機のように吸い込まれ、ぬいぐるみの中に消えていった。

「えっ何？どうなったの！？」

あまりに突然だったので、あたしは何が何だかわからなかった。

『うーむ、少しごわごわしてるけど、まあまあ居心地はいいな』

義将の声は間違いなくウサギから聞こえてくる。まさか本気でぬいぐるみに入っちゃったの？

あたしがあっけにとられていると、義将の上機嫌な声が聞こえてきた。

『ま、お前が知らない間にこういうことも覚えちゃったんだな、オレ』

でも確かに、こうしていれば一日中義将を監視しなくてもいいし、義将も女子にいたずらできないし…

あたしの顔に笑みが広がる。やれやれ、今回は一本とられたみたい。「やるじゃない」

義将がにやにやしているのがわかった。

あたしは駐輪場に自転車を置き、校舎に入っていった。

第8話

あたしは階段を駆け上がり、廊下の突き当たりの教室へ向かった。

「28」と書かれた教室からは、がやがやとひととき大きなしゃべり声がある。

うちのクラスは校内でも指折りのバカがそろってるからだ。

ガラガラとドアを開けると、その声はいつそう大きくなった。

ドアの近くの席では、バリバリに化粧した茶髪の女子軍団が恋バナで盛り上がっている。（義将が『こいつらはヤマンバか?』と恐ろしかった）

何人かの男子は教室のうしろのスペースを陣取って野球をしている。ちなみにボールは丸めた手袋で、バットはマフラーだ。

そこからは時折歓声が上がった。

あたしはヒットが飛んで来ないように祈りながら、そろそろと一番後ろの机にカバンを下ろした。

すると、肩をぽんと叩かれた。

「万夜、おはよ」

うしろを振り返ると、サラツとした黒髪が目に入った。くせつ毛のあたしには永遠のあこがれだ。

「麻海^{あさみ}ー、おはよっ」

麻海はにこつと笑った。女のあたしでもズキユンときてしまうかわいさ。

おとなしくて優しい性格の麻海は、男子にもモテモテだ。

あたしにはない物をみんな持っててうらやましい。

そういえば、麻海の長い黒髪を見ると何かを思い出す。
何だっけなあ…

その時、バーン！とドアが乱暴に開けられた。みんな一瞬静かになり、ドアに視線が注がれる。

すると、息を切らした女の子が興奮したようすで教室に飛び込んで来た。

「ねえっ！今日このクラスに転校生来るんだって！！」

「えええーっ！まじで！？」

教室は一瞬にしてハイテンションになった。

女子は『転校生』の情報を聞き出そうと、入って来た女の子の周りに集まっていく。

「ねっ、行ってみない？」

そう言った麻海の目も好奇心できらきらしている。

「う、うん…」

あたしは麻海に引っ張られて輪の中に入っていった。
何かがスツキリしない。何を忘れてるの？

「さっきね、職員室に行ったのよ！そしたら、超美形の男の子が担任と話してて『じゃあ今日からうちのクラスの一員だな』って言うのが聞こえたんだから」

「えっ待って、超美形ってマジ！？」

「マジマジ！背高くて黒い髪で、顔なんてもう…超かっこいい！」
「「キヤー！」」

黒い髪、転校生、男の子…

「あーっ！そうだった！！」

あたしは思わず叫んだ。

みんなからの怪しげな視線があたしに注がれる。

「万夜：どうしたの？」

「あーいや、何でも…」

はははと苦笑いすると、また話は再開した。

『お前：忘れてたのか』

義将があきれた声で言った。

だって…おじいちゃんにすっごい怒られてそれどころじゃなかったもん…

だけどころしちやいられない。

あたしはこれから来る転校生と友情を築かなきゃいけないんだから。

その時、キンコンカンコン…とチャイムが鳴り響いた。

あたしの心臓はドクドクと高鳴り始めた。

第9話：転校生

ホームルームの始まりのチャイムが鳴って、みんなバタバタと席に着いた。

鳴り終わると、中年のオジサン先生が教室に入ってきた。今日も立派なバーコードだ。

「起立つ、礼！」

あいさつが終わってみんなが前を向くと、先生はいつものようにキョドキョドし始めた。

このオジサンは注目されるのがえらく苦手な人らしく、暑くもないのにつるぴかの額には汗が輝いている。

それをしわくちやのハンカチでいそいそと拭きながら、先生は話しだした。

「えー…まああれだな、今日は3年がテストということだ…」

その間も、あたしの胸は休むことなくドクドク言っていた。

どんな人なんだろう。依頼のことを別にしても、早く顔が見たい。

先生ののろい会話スピードにやきもきした。

「えー…それでだな、これが最後の連絡だが…今日からこのクラスに新しい生徒が増えることになった」

来たっ！

「それでは、えー…なるかみ成神くん、入りなさい」

全員の視線がドアに集中する。すりガラスに人影が揺らめき、ゆっ

くりと戸が開けられる。

そして、『転校生』がずっと教室に入ってきて来た。

あたしは息を飲んだ。 その完璧な容姿に。

背が高くてすらっとしているのに、無駄なく筋肉がついた体型。
あたしと違って贅肉なんてものはまったくついてなさそうだ。

黒い髪はワックスでいい感じに崩れてあって、左耳からは小さなピアスが覗いている。

でも何より目を引いたのは、その顔だった。

真ん中まで歩いて来て正面を向いたとき、そのすべてがあらわになった。

信じられないほど整っている。

すっ通った鼻筋も、薄い唇も、どこを取っても完璧だ。

だけど、真っ黒な瞳は冷たく、鋭かった。まるで何者も寄せつけまいとしているかのように冷たい瞳。

まるで威嚇しているかのようなその視線に、少なからず恐怖を感じた。何だかすごく怖そうな人だ。

クラスの間みなも同じことを思っているに違いない。

担任はかわいそうに、すっかり彼の冷たいオーラに怯えているらしい。

「じ…じゃあ、一言軽くお願いしてもいい…かな？」

と、しどろもどろに言った。

『彼』は低い声で自己紹介をした。

「なるかみそつや成神聡也です。よろしくお願ひします」

冷たく感情のない声には、よろしくなんて気持ちはこれっぽっちも

含まれていなかった。

とその時、成神聡也の視線があたしを捕らえた。あたしは射抜かれたように動けなかった。あたしの心臓はこれまでにないほどドキドキしている。

すると、成神聡也の眼がみるみるうちに険しくなった。その黒い瞳には、憎しみさえ宿っているかのようだ。

あたしは恐怖でブルツと体が震えた。まさに『蛇に睨まれた蛙』状態。

あたしは自分がぽかーんと口をあけていたことに気づき、あわてて口を閉じた。

彼から見たら、さぞマヌケな顔だっただろう。

と、彼の視線がふつとはずれ、あたしは解放された。だけど、まだ胸が苦しい。

何であんな眼で見てくるの？

成神聡也は「すんだぞ」という風に担任のほうを見た。

バーコードが乱れていないかチェックしていた先生は、ぱつと頭から手を離れた。

「おお、終わったのか…じゃあ、ええつと…」

先生は教室を見わたしている。何だかいやな予感。運の悪いことにあたしの隣は、空席だ。

「じゃあ…あの端っこの席で、いいかな？成神くん…」

「はい」

やっぱり来たーーーーー！

彼は通路をつかつかと進み、あたしの隣の席に座った。あたしは周りが一瞬にしてぴりぴりした空気に変わるのを感じた。そこでホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

先生はそそくさと教室を出て行き、あたしは気まずい雰囲気の中に
取り残される。

この人と仲良くなれって？ムリだ…

第10話（前書き）

こんにちは！実はこのたび、読者のみなさんのおかげでこの小説のアクセス数が2000を超えました！こんなにたくさんの方を読んでもらえるなんて、本当に嬉しい限りです。年末年始で更新が遅くなりますが、みなさんに楽しんで読んでもらえるようがんばって書きたいと思います。これからもよろしくお願いします。

第10話

な…何なのよあの男はっ！

あたしは一人トイレでうなだれていた。

なんか感じ悪いし怖いし、どうやってあれと仲良くなれっていうのはあー…とひとりでにため息がこぼれる。

『ずいぶん無愛想なやつだな、お前が友だちになる男ってのは』
ほんとよっ

顔を上げて鏡を見ると、今朝スプレーを吹きかけた寝癖は見事に再発していた。

暗い気分で水をつけていると、麻海がトイレに入ってきた。

「あつ万夜、ここにいたんだ」

にこつと笑ってあたしの隣りに立つ。

「…ねえ麻海…さっきの転校生、どう思う？」

麻海はちよつと困った顔をした。

「うーん…何ていうか、近寄りがたい感じだったよね…かつこいいけどすごく怖そうだし」

だよね…

ていうかあれは、自分から近寄らせないようにしてるって感じ。

あの嫌悪感に満ちた瞳を思い出した。

「万夜、隣の席だけど…がんばってね」

「うん…」

とは言ったものの…

そのあとの時間は気まずい一言だった。

『やつ』はこっちに見向きもせずに窓の外を眺めている。

…やっぱりこれは、話しかけるべきなの？

結果は明らかに目に見えているけど。

それにあの瞳に耐えられる自信が全くない。思い出だけでぶるっと身震いしてしまう。

話しかけたりなんかしたら、視線で殺されるだろう。

ええい、負けるもんか！

「あああ…あのっ」

なけなしの勇気をふりしぼる。

ありえないほどかつこいい顔がこっちに振り向いた。
うわーっあたしほんとに話しちゃってる。

「え…ええと、その、困ったこととかあったら何でも聞いて…下さ
い…」

なんであたし敬語？

思わずツツコミを入れてしまうほど情けないしゃべり方だ。
すると相手はふっと視線をそらした。

「別に、あんたに世話になることなんてない」

そう冷たく言った。

こいつ…こっちはこんなに親切に言ってるのに…！
笑顔が引きつりそうだったが、ギリギリ我慢した。

「あ、あはは…まあそんなこと言わないで…あっ、あと学校の中と
かわからないとこあったら…」

「いらないって言ってるから」

成神聡也は突きはなすように強く言い放った。

「あんた、しつこい」

その言葉が心をぐさりと刺した。

さっきの眼だ。

びくつと心臓がはね上がった。憎しみと嫌悪感をひしひし感じて、
背筋に寒気が走る。

「う…ごめんなさい」

謝ってその場から立ち去るしかなかった。

そしてそのあとは成神聡也と一つも言葉を交わすことなく、一日が終わった。もうあたしに、それ以上話しかける勇気はなかった。

帰り道、あたしは自転車をとぼとぼ押して歩いていた。
あたしは何をしたわけでもないのにゲツソリと疲れ切っていた。
持つてる精神力を全部使い果たした気分だ。

家にたどり着き、夕飯も食べずにベッドに倒れこむ。
とにかく今は何もせずに休みたかった。

義将が負のオーラを発しているあたしに近づいてきた。

『ま、お前には少々難しい相手だってこつたな。明日またがんばればいいんじゃないか？』
と、何気なく言った。

あたしは聞いてるようで聞いていなかった。頭の中がもやもやした感情で埋め尽くされていく。

あたし、何やってんだろ。見るからに冷たい転校生にわざわざ話しかけて？結局突き放されて？かっこわる…

「もうやだ」

心に積もった不満が固まっていく。

口からわずかに漏れた気持ちは一気に流れ出した。

「もうやだよ、こんなの。大体、何であたしはこんな意味不明なことしなくちゃいけないのよ？あの女の人が自分で会いに行けばいいじゃない。おかしいな依頼してきて…あいつと仲良くなるって何？あんな感じ悪いやつと？意味分かんないしっ！」

愚痴まじりに一気にぶちまけた。

部屋はしんと静まり返っている。

あれ？なんで何も言わないの？

『お前、本気で言ってるのか？自分で会いに行けばいいって？』

「え…？」

義将は険しい顔をしていた。あたしが見たことない義将だった。

静かな声に、聞きなれた明るい面影はない。

『どんなに話しかけても気付いてもらえない。だから見てることしかできないんだ。幽霊がどんな思いをしているか、考えたことがあるか？お前は簡単に幽霊と話せるからわからないかもしれないけどな』

あたしは何も言えなかった。

『きつとあの幽霊も何かを伝えられずにいる。お前はそれができる。だからあのおなごはお前のことを信じて、依頼したんだ。それを投げ出すのか？オレも、力になれるやつはお前だけだと思うけどな』
義将はそう言ってふっと消えていった。

あたしは空っぽの部屋に一人取り残された。時計だけがカチカチと音を響かせている。

幽霊がどんな思いをしているか、考えたことがあるか？

いとしい家族にも友達にも存在を気づいてもらえない、思いを伝えられない歯がゆさ。空気のように扱われるつらさ。

あたしは幽霊とも人間とも話せる。思ったことをすぐに伝えられる。そんな気持ち、考えたことなんて、なかった。

どんなに悲しいだろう。

その夜あたしは沈んだ気持ちで目を閉じた。

第11話

ちゅんちゅんと小鳥の音がする。あたしはぱっちりと目を開けた。まだ外は明るくなつたばかりらしく、カーテンからオレンジ色の光が差している。

こんなに早起したのは久しぶりだ。背伸びをして部屋を見渡す。やっぱり義将はいない。

あたしは制服に着替え、髪型もワックスでぱっちりセットした。そして、じつと鏡を見つめた。目の下にうつすらくまができていくけど、どこにでもいそうな普通の少女が映っている。

あのおなごはお前のことを信じて、依頼したんだ。

昨日の義将の言葉がよみがえる。

違う。あたしはそんな大した人間じゃない。ただ能力を持つてるだけ。嫌なことからはさっさと逃げ出そうとする、最低なやつだ。

だけど、そのままで終わ리たくはない。

こんなあたしでも、あの女の人のためにできることがあるって信じたい。

あたしはしゃきつと体を起こして、階段を下りた。

キッチンに行くと、圭太が朝ごはんを作っている最中だった。

「えっ…万夜！？いったい何があつたんだよ？」

圭太は万年お寝坊のあたしが立っているのを見て、信じられないって顔をした。

「別になんでもないわよ」

圭太は疑わしげにじろじろ見てきた。

「ふーん…万夜にもちゃんと早起する知能が残ってたのか。びつくりだなこりゃ」

「んだとつ小僧！」

あたしは必殺パンチをお見舞いした。

「おわっ！いつてーな、味噌汁こぼれるだろ！バカ！」

なべを片手にぶんぶん腕を振り回す弟はかなりかつこ悪い。あたしは思わず笑ってしまった。

あたしは早めにご飯を食べて、出かける支度をした。

今日は絶対に、ちゃんと話してやるんだから。もう怖い気持ちは一つもなかった。

今からでも遅くないだろうか。義将をがっかりさせてしまったけれど。

もうあたしに失望して、帰ってこないかもしれない。

そう思うと、一瞬暗い気持ちが悪くなる。そして、ガラガラと戸を開けた。

するとあたしは、家の前にあたしのおんぼろ自転車が置いてあるのを見つけた。

自転車は倉庫にしまっているの、ここにあるはずはない。でもあたしにはすぐその原因がわかった。

荷台の上に乗っかってあぐらをかいているのは、義将だったからだ。きつと、靈力でここまで運んできてくれたに違いない。

あたしの足音に、義将は振り向いた。

『やる気になったか？』

あたしはうなづいた。

「ごめん。もう絶対、投げ出したりしないから」

義将は視線を落として、ぱりぱりと頭をかいた。

『まあ、オレもつい言い過ぎたっていうか。長年幽霊やっていると、やっぱな』

あたしは微笑んだ。

「わかってるって」

『ま、とりあえず、ここから朝日奈万夜の本番ってわけだな』
「そっ」

第12話：新たな謎

いつもより30分も早く学校についた。

学校にはまだ人がまばらにしか来ていないみたいだ。

教室のドアをガラツと開けると、他の子と話していた麻海があたしに気付いてそばにきた。

「おはよ万夜、今日早いね…いつもはギリギリに来るのに」

「ちよつとね…」

そう言いながらあいつの席をちらつと見る。

まだカバンがない。

「あの転校生、まだ来てないんだ…」

「うっん、来てるよ？」

「へっ？」

「私、今朝見かけたの。屋上に行く階段を登ってつたよ」

屋上ね…行ってみるか。あたしはくるつとUターンした。

「サンキュッ、麻海！」

麻海はにっこり微笑んだ。

薄暗い階段を一段とばしで駆け上がる。

何でこんなに急いでるのか自分でもわからないが、妙に気持ちが急いでいた。

息を弾ませて、屋上に出る扉の前に着いた。

薄汚れた扉はちよつと開いている。やっぱりここにいるんだ。顔を押し当てて隙間から外を覗いてみた。

広いコンクリートの地面に一人寝っころがっている人影が見える。

間違いなく、彼だ。

寝ているのだろうか？そっちのほうで安心だけど。

『あいつに会って何話すんだ？』

うーん確かに：何を話せばいいんだろう？まともに言葉のキャッチボールはできないだろうと断言できる。

「とつ、とりあえず、あいさつからよね！」

気合いを入れてガッツポーズで言ったのに、義将はため息をついた。

『いや、やっぱオレが見てくるから小娘はここから覗いてる』

義将はウサギから出てくると、ふわふわとあいつに近付いていった。義将は寝転がっているあいつの顔を覗きこんだ。

『おーい美少年、起きてるかー？おーい！！』

そう、彼の耳元で叫んでいる。

なに無駄なことやってんだか：聞こえるはずなのに。

すると、成神聡也ががばつと起き上がった。

それだけじゃない。なんと、あろうことが義将の襟元をがつと掴んだのだ！

あたしは心臓が飛び出しそうになった。

幽霊に触れる：？そんなのありえない！

義将は突然掴みかかれてどつきりしている。

『お前：何でオレに触れるんだ？』

義将は苦しまぎれに言った。

「さつきから黙って見ていれば：人の眠りを邪魔しやがって」

そう低くつぶやき、成神聡也は掴んだ手に力を込める。締め上げられた義将はうげーっとうめいた。このままじゃ義将が危ない。

あたしがまごまごしていると、成神聡也は振り返らずに言った。

「あと、そこにいるやつ。何してる？」

ぎくつ。間違いなくあたしのことだ：

ばれたならもう隠れている必要はない。あたしはそろそろと戸を開けて屋上に出た。

「あの：その人、放してあげて」

あいつは頭をかすかにこっちに傾けた。

「この幽霊…あんたの連れか？」

うーん、連れっていうか、なんというか…

あたしが迷っていると言いついては、義将が目を見てきた。『何でもいいから言
つとけ』と言っている。今にも死にそうだ。

「あー、うん。まあそんな感じ」

成神聡也は怪訝そうにあたしを見て、ぱつと手をはなした。

義将はすぐに飛びのくと、げげほと咳き込んでいる。

彼はすつと立ち上がったあたしのほうを向いた。

「あんたも幽霊を連れて歩くなら、ちゃんとしつとけ。人の睡眠
を邪魔しない程度にはな」

そう言つて義将を睨んだ。当の本人はせいぜい言いながら必死に呼
吸を整えている。やれやれ。

成神聡也はふんと鼻を鳴らし、あたしの横を通り過ぎて屋上から出
て行くとした。

そこであたしは大事な質問を思い出した。ぱつと振り向き、階段を
下りていく彼に叫んだ。

「ねえっ！何でさわれるの!？」

彼は足を止めて振り返る。

「あんたが知る必要はない」

そう一言言つて、すたすたと階段を下りていった。

あたしはしばらく動けなかった。あたしと同じように幽霊と話せて
しかも触れる…どうなってるの？

ようやく正常な呼吸を取り戻した義将がよろよろと戻ってきた。

「まあ、あれだな…かなり…力が強いってことは確かだな…うん」

第13話

あたしは階段に座り込んでいた。

義将はさつきからやけに襟元を気にしている。何百年かぶりに体を触れられたのだから無理もない。

でもまあ、久しぶりにイタい目にあえて少しは思い知ったかも。これで少しはいたずらを控えてくれることを祈るのみだ。

それより、問題は『彼』だ。

正直言つて、あたしは自分と同じような能力を持つてる人に初めて出会った。

テレビでなら山ほど見てきたけど。心霊番組とか、幽霊が見えるって人が山奥の廃屋に潜入するやつ。

はつきり言つて廃屋なんかに入ろうっていう人の気が知れない。

大抵、番組の終わりのシーンで廃屋から出てきたアイドルには『憑いて』いる。「怖かったですね」と言いながら肩に幽霊を乗っけてるんだから、見ているこっちは気味が悪いことこの上ない。

あたしに言わせれば、霊能力者のくせに幽霊がわんさかいそんな所にづかづか入って行くなんでどうかしてる。

そういうことをするのは、大抵『見えるだけ』な人だ。

でも彼は違う。あたしと同じように話ができるだけでなく、さわれるという能力まで備わってる。

あたしもそういう力があつたら、義将がいたずらしてきたときパンチをお見舞いしてやれるのに…

義将はあたしの視線に気づいてにやけた。

『なんだよ〜そんな見んなって！男前なのはわかるけどよ〜』
「違うっ」

とりあえず、今はプラスに考えとこう。彼の前では見えるものを見えないフリしなくてもいいってことだし。慎重にしてなきゃいけないのは義将だけだし。

さすがにもう苦痛は味わいたくないだろうから。

『ってかお前、フツーに話してたじゃねーか。あの、成なんとかってやつと』

義将は名前を口にするのもいやだという風に言った。

「成神、でしょ」

口に出して言ってみると神秘的な名前。何か力が宿っていそうな感じだ。（神社の名前でありそう。『成神神社』）

言われてみれば、あたしさっきちゃんと話せてた。昨日からしたらたいした進歩だ。

それどころか、正直に言うとなたしは、彼に興味を持ち始めてる気がする。ひょっとしたらまだ秘密を持つてるかも。そう思うとわくわくしてくる。

思ったよりこの仕事、当たりかもしれない。

「よしっ、とりあえず、成神聡也を徹底的に調査するわよ！」

『え…ほんとに？』

義将はかなり気が乗らなさそうにつぶやいた。

その日あたしは、彼をできるだけつぶさに観察した。ストーキングにならない程度に。そして得た情報は

1、休み時間はたいてい屋上に行ってるみたい。授業をサボるときも同様。

2、これといって親しそうな友人もなし。一匹狼で行動してる。（というより、あのありえない容姿とつめたーい性格でみんなも気安く近づけない）

3、昼ごはんはきつと購買のパン。（なぜかというと、昼休みに手ぶらで教室を出てったから）

とまあこんな感じ。うーん、これといって興味をそそるものはない。部屋のベッドにごろりと転がった。

義将は今日は早々と姿を消している。たぶんくたくたなのだろう。あたしもさっさと寝よう。立ち上がってカーテンを閉めようとした。あたしの部屋の窓からの眺めはほんとにサイコーだ。なんてったって、ちよつと下を見下ろせば墓場なんだから。

おまけに今日はざわざわと嫌な夜風が吹いていて、迫力満点だ。ぶるっと身震いしてとつとカーテンを閉めようとしたとき、何かが視界に入ってきた。

あたしははつとして墓場を見下ろした。

一つ、ぼうつと白い光が見える。あれは 幽霊だ。

光はあたふたと落ち着かず動き回っている。まるで何かから逃げるように。

その時、ドカツと鈍い音がして幽霊の近くの墓石がガラガラと崩れた。

幽霊は慌てて姿を消そうとすうつと薄くなったが、その光は何かにかき切られて、消えた。

何が起こってるの…？あたしは暗闇に目を凝らす。

ぼんやりと何かがいるのが見えてきた。形からしておそらく人だ。

すると、そいつははつと気づいたようにこつちを見た。真っ赤なぎらぎらした目が獣のように光っている。

あたしは怖くなって、カーテンをすばやく閉めた。そしてベッドにもぐりこみ、息を潜めた。

5分くらい経っただろうか、おそろおそろカーテンの隙間から外を覗いてみる。

もうそこには誰もいなかった。

第14話

「まったく！どこのどいつだ、罰当たりめ！」

庭そうじから帰ってきたおじいちゃんは、顔を真っ赤にして怒っている。

檀家のお墓を誰かに破壊されたことにそうとうご立腹らしい。

あたしはその真相を知っていたけど、黙ってもぐもぐご飯を食べた。昨日のことを説明するには、幽霊を見たことから言わなければいけない。このカタブツおじいちゃんは幽霊なんて信じていないから、あたしが夢を見たと思うか、病院に連れて行くかどちらだろう。だからおじいちゃんは、あたしの解決屋のこともおかしな小遣い稼ぎか何かだと思っている。

「ほんとにけしからんやつだ…仏様を粉々にしておって！今度来たら取っ捕まえてやる」

おじいちゃんはぶつぶつ言いながら納豆をぐしゃぐしゃ混ぜた。

墓石をぶっこわすようなやつを果たして捕まえられるのか不明だけど。あの真っ赤な瞳を思い出した。

そういえばどこかで見たような気がする。あの血のように赤い瞳を

そう、あの夢の中で。

昨日見たやつは夢の中のあいつなの？

だとしたら、あの恐ろしい夢が現実になるということだろうか。

「冗談じゃない！殺されるなんて。何も起こらないことを祈るのみだ。」

あたしは身震いして味噌汁をすすった。

うちの朝ごはんはいつも味噌汁が出る。圭太に言わせると「何入れてもいいし作るの楽だから」らしい。

ちなみに今日は野菜とちくわ、そしてトウモロコシが入っている。

味噌汁にトウモロコシなんて、コーン好きのあたしに言わせればまさに冒瀆。

ああ、一度でいいからベーコンエッグに野菜サラダに、あつあつのコーンスープの朝食を食いたい…

自分の料理の腕をここまで口惜しく感じる瞬間はない。

でもまあ、朝食は手抜きだけど、圭太は晩ごはんにはかなり手をかける。ああ見えて料理にはこだわりを持ってるから。

あたしなんか作ってる途中にキッチンに入ろうものならとたんに追い出される。あたしに手伝わせるとどうなるか幼い頃から身をもって経験してきたからだ。圭太の料理の腕はあたしの存在によって磨かれたと言ってもいいくらい。

あたしも少しはうちの食生活に貢献したいって思ってたけど、最近何もしないのが一番だとわかった。

あたしにできるのは、洗濯機を回して中身をおじいちゃんに干させるくらい。

口の中でトウモロコシと味噌がビミョウなハーモニーを奏でていたけど、文句は言わないでおいた。

圭太がいるから家事が成り立ってるんだもの。多少口の悪さに目をつぶれば、いい旦那さんになるはずだ。

「なあ」

ご飯を食べ終わって玄関に向かおうとすると、圭太がふいに声をかけた。珍しく怪訝そうな顔だ。

「何？」

「…いや、やっぱなんでもない」

「あたしに一日会えなくてさみしいか？そうかそうかー」

「超嬉しい！」

あつそ、ふーん。あたしはすたすたとキッチンに戻っていく圭太の

背中を視線で攻撃しておいた。

外に出ると、息が白かった。冷たい空気に触れた肌がピリピリする。あたしはマフラーに顔を深くうずめた。

今日も自転車はスタンバイされていた。荷台に義将を乗つけて。

『おまえ寒そうだな』

着物一枚のあんたのほうが寒そうだけど。でも真冬に何を着てたって義将には関係ない。感じないんだから。

「いいから学校行くわよ」

あたしは裏のお墓をちらりと見て、自転車に飛び乗った。

第15話（前書き）

第14話を大幅に変更しています。変更前にすでに読んでしまったという方、本当に申し訳ありません…。

今後こんなにも投稿済みの話を変更することはないので、今回はご了承ください。

第15話

教室にたどり着くと、今日も彼はまだ来ていなかった。また屋上に行ってるんだろうか。

『へっあんなやつ、来なくていいんだよっ!』

義将がそうつぶやくのが聞こえた。昨日のことですっかり彼のことを嫌いになったらしい。

あたしは聞こえないフリをして麻海のところに行った。

あたしに気づくと麻海は駆け寄ってきた。

「ねえ万夜、ちょっと3組まで行きたいんだけど、いい?」

「いいけど、どしたの?」

「借りてたマンガね、返しに行きたいの」

麻海の手には黄色い袋が握られている。あたしは頷いて、一緒に教室を出た。

あたしたちはぶらぶらと廊下を歩いていった。途中で何人かにあいさつしたりもした。クラスが違うからほとんど話さない子たちだけだ。

教室でも、あたしはほとんどいつも麻海という。麻海は他の子みたいに、沈黙をおしゃべりで埋めたりしない。だからあたしは一番気楽で、落ち着いていられる。

はじめはブリッコなのかと思っていたけど、一緒にいるようになってぜんぜんそんなことないって気づいた。麻海のふんわりしたかわいさは天然ものだ。

それに、今どきの女の子にしてはすごくきれいな心を持ってる。素直で、純粹で。

まさに『天使』って感じた。

こんな女の子になれたら、っていつも思う。

マンガを返し終わって、あたしたちはまた教室に向かった。その時、麻海のケータイの着信音が鳴り出した。

「麻海ー、鳴ってるよ?」

「あ…う、うん」

あわててポケットから取り出そうとした麻海は、ケータイを落としてしまった。

「あっ」

かがんで拾おうとした麻海の手より早く、誰かの手がケータイを拾い上げた。

「大丈夫?」

まるで歌うように滑らかな声に、あたしたちは同時に顔を上げた。そこには、長身の男の子が立っていた。長めの髪は明るい茶色で、耳にはピアスがじゃらじゃら付いている。なんだか軽そうな人だ。その男の子は自信に満ちた笑みを浮かべながら、ケータイを差し出している。

あたしの直感では、絶対ナルシスト。

「あの、ありがとうございます」

「ああ、お礼なんかいいって。こんなかわいい女の子にかしこまられたら、何だか悪いしね」

ぺこりと頭を下げた麻海に、彼は脱力しそうな殺し文句を平気で言っただけだ。

そして麻海の手に分の手をそえてケータイを手渡した。（ゲーッ!）

あたしの予想は大当たりだったみたい。

「じゃあね」

その人は軽く手を上げてあいさつすると、すたすたと歩いていった。

あたしはようやく顔の引きつりから解放された。

「なんか…すごい人だったね」

「うん…すごくかつこよかった…」

「え!？」

あたしはぎよつとして麻海を見た。着信が切れてしまったのも気にせず、ほつぺたをポツと赤らめてうつとりしている。ま、まさか。冗談でしょ？

「麻海、もしかして今の人のこと」

麻海は答える代わりに顔をさっきよりも真っ赤にした。

あたしは叫びだしたい気分だった。麻海の男の趣味にここまでツツこみたいと思ったことはない。

だけど、こんな性格の麻海だからこそ「えーっ! あんなのどこが いいの!？」なんて言えない。

「そ、そっかあ」

と笑顔で言うのが精一杯だった。

そのあとあたしは、放っておけばふわふわと飛んでいってしまいそうな麻海を教室までつれて帰らなければいけなかった。やれやれ、なんだかおかしいことになりそう。

第16話

学校は本当に何事もなく終わった。というのも、彼は今日ずっと来なかったから。

こっちはいつ来るかとひやひやしてたのに損した気分だ。

麻海はあの一泊中ポーツとして、授業中もあらぬ方向を見つめていた。話しかけても、あたしの声が脳みそに届くまでに2秒はかった。

一目ぼれなんてマンガの中だけのことだと思ってたのに、まさかこんな形でお目にかかるなんて。しっかり者の麻海をこんなにしちゃうとは、恋愛って恐ろしい。かわいいつて言えばかわいいけど、今の麻海は本気で心配だ。ふらふらと事件に巻き込まれそうでほんと危なっかしい。

あの男の子のどの辺にクラツときたのかあたしには理解不能だけど、きつと麻海にはキラキラの王子様に見えているに違いない。

友人として文句の付け所ありすぎだけど、でも麻海が本気で好きになった人なら応援するつもり。根っから悪い人ってわけでもなさそうだし。

あたしはせいぜい麻海が危ないことに巻き込まれないように見守ってしよう。

いつもより200%くらい輝きを増している麻海の笑顔に「バイバイ」と言っ、家に向かった。

あたしは人通りの少ない道をとぼとぼと歩いていた。すぐ横のバリケードの向こうからは工事のけたたましい音が聞こえてくる。

「はあー…恋かあ」

ひとりでに口からこぼれた。

『はーん、小娘も男が恋しくなったか？』

「違うわよ！」

男がほしいって訳じゃなくて、恋がしてみたいと思っただけ。恥ずかしいことに、この１７年間誰かを好きになったことがない。

だから恋愛と言われても想像でしか知らない。好きになった男の子と付き合って、手をつないだりキスしたりするんだろうな、ぐらいきつとすごく幸せなんだろうなとは思うけど、あたしのもとにはなかなか舞い降りてきてくれないんだから仕方ない。

「はああー、いいなあ麻海…」

『お前もその辺の男適当にひっさらえばいいじゃねーか』

「だからそうじゃなくて」

そう言いかけたあたしの目に映ったのは他でもない、「彼」だった。道の向こう側を歩いている彼は制服のままだ。やっぱりさぼりだな。すると、あたしの視線に気づいたのか彼はこつちを向いた。そしてあたしと目が合うと明らかに嫌そうな顔をした。失礼なんだから。あつかんべーでも返してみようか。

そう思ったとき、彼の表情がさっと変わった。

あたしはどんな反応を返すかで頭がいっぱいで、そんなことは微塵も気にしなかった。

でもあたしがその意味を察したのは、何かの影があたしをすっぱり覆ったからだった。

あたしはすぐに上を見上げた。

なんと、大きな鉄のかたまりがあたしに向かって降ってくる。

それがちらつと見えたのを最後に、視界は一瞬で暗くなった。耳元

で風がごうとうなるのが聞こえる。

あたしはいつの間にか目をつぶっていたらしい。かたく閉じていた目をそつと開けると、最初に見えたのは成神聡也の横顔だった。すぐくきれいな横顔。あたしはそれにしばらく見とれていたが、自分の肩をしっかりと掴まれている感触があることに気がついた。よく見てみると、あたしはあろうことか、彼にお姫様だっこされていたのだ。

顔は一気に熱くなり、頭は湯気が出るんじゃないかというほど沸騰してあたしは危うくパニックにおちいりそうになった。

あたしはドスンとおしりから地面に落下し、情けない声をあげた。

工事現場の人たちがどたどたとこつちにやってくるのが聞こえる。あたしは地面にへたりこんだままあたりを見回した。人ばかりでよく見えないが、巨大な鉄筋コンクリートがひび割れたアスファルトに半分埋まっているのがわかった。間違いない。さっきあたしの上から降ってきたやつだ。

「大丈夫です。離れたところにいたので」

成神聡也が冷静に説明している声も、あたしの耳には入らなかった。

あたしは頭の中で今起きたことを整理した。

- 1、道を歩いていて、彼を見つけた。
- 2、見上げると、鉄骨が落ちてきた。
- 3、なぜか助かって成神聡也にお姫様だっこされていた。
- 4、おしりから落つことされた。

どう考えても2と3の間がおかしい。　ていうかありえない！

ばつと顔を上げると、成神聡也は工事現場の人に一通り話をつけてすたすたと立ち去ろうとしていた。

「ま…待って！」

声を出すのがずいぶん久しぶりのように感じた。彼は足を止めずに歩き続けた。

あたしは追いかけようと自転車の姿を探した。それはすぐに見つかった。

変わり果てた姿で。

さっきの鉄筋コンクリートの下でぺしゃんこになっていたのだ。

「あああーっ！あ、あたしの自転車…」

おんぼろだけとお気に入りだったあたしの赤い自転車…

だけど今は彼を追いかけるほうが先だ。自転車のなきがらに泣く泣く別れを告げ、あたしは遠ざかっていく彼を全力で追っていった。

何分経っただろうか、あたしのお粗末な体力は限界に近づいてきた。こっちは走ってるのに、早歩きに追いつけないってどういうこと？すると、ありがたいことに彼は足を止めた。

あたしはよろよろとスピードを緩め、ぜいぜい言った。

「なんでついてくるわけ？」

振り返った彼の顔は、いつもと変わらない無表情だ。

あたしは呼吸を整えて彼と向き合った。えらく走らされたおかげで、足がふらついている。

「ねえ…さっき、道の向こう側にいたはずだよね？」

興奮して声が震えた。あたしがそう言うと、彼は目をそらした。

「さあ」

「絶対いた！なんであたしを助けられたの？遠くにいたのに？普通あんなに速く動けるわけない！」

「普通だったら、な」

あたしは口をつぐんだ。その言葉の意味がわからなかった。あたしのことをからかってるんだろうか。

「何それ…普通じゃないって言いたいの？」

冗談のつもりで言った。だけど彼の表情は少しも揺らがなかった。

「
だとしたら？」

第17話：彼の正体

普通じゃないとは思っていた。幽霊にさわれるとか、ありえないほど美少年ってことなら。

だけどまだ何かある気がする。

そう感じたけど、あたしの直感だからあんまり期待しないことにした。

少なくとも「だとしたら？」っていうのは、まだ質問させてくれるってことよね？

ここは慎重に行かないと。こんな貴重な質問のチャンスを逃すわけにはいかないもの。

あたしは頭の中で必死に言葉を手繰り寄せた。

「だとしたら…どこが普通じゃないの？」

彼は至って落ち着いた口調で言った。

「幽霊に触られる。あと、人間以上の身体能力を持ってる」

「さつきもそれで助けてくれたの？」

「ああ」

つまり、あの一瞬であたしの所まで走って、抱きかかえて、離れた所に移動したってこと。オリンピック選手も真つ青の身体能力だ。

だんだん彼が人間なのかさえ怪しくなってきた。

どんなにがんばっても、人間はそんな体にはなれないはずだ。

「変なこと聞くけど、本当に人間だよな？」

彼は視線をそらした。

「いや…」

かすかだけど聞こえた。

人間じゃない？

「あなたは何者…？」

彼はあたしを見つめた。その闇のように真っ黒い瞳に吸い込まれそうだ。

そして、彼の口が小さく動いた。

「鬼」

才二。あたしの頭にその二文字がぽっかり浮かぶ。

おに？この目の前に立ってるのが鬼？

はつきり言って

「俺、スーパーマンなんだ」とか言ってくれたほうがまだしっくりきたと思う。

「研究所で薬を投与されて、こんな体になっちゃったんだ」とか。

頭がくらくらしてきた。物語の世界にでもほうり込まれた気分。

もしかしたらまた寝過ごしてて、夢を見てるのかも。

手の甲をつねってみたけど、やっぱり痛かった。

あたしは目の前の男をしげしげと眺めた。

違う。あたしの知ってる「鬼」はこんなじゃない。

鬼って、頭に角があって鋭い牙があって、虎のパンツをはいてるんじゃないの？

頭だってこんなサラサラした現代風じゃなくて、もじやもじやのアフロで。

この男の子にはあたしが鬼と認識できる要素は一つもない。

だけどさっきの、あんなすばらしい運動神経を身をもって体験したんだから信じるほかない。この人が人間じゃなかったおかげであたしは助かったんだから。

だけど、そんなの別に鬼じゃなくたっていいんじゃない…

「信じないのは勝手だけど」

彼は特に気にした風もなく言った。

うだうだ考え事をしていたあたしを見て、疑ってると思ったみたい。

「う、ううん！信じる」

あたしは半分うそをついた。だってカタブツだと思われたくないもの。うちのおじいちゃんみたいに。

そこで素朴な疑問が浮かんだ。だって冷たくてあんまりしゃべらないやつと思ってたから。

「ねえ。何でそんなこと、あたしなんか話してくれるの？秘密なんじゃないの？」

「言わないとしつこく聞いてきそうだったから」

ぐっ、まあ否定はできないけど。

だけどそんなに即答しなくなっちゃった。

「何でだろう…君には知っていて欲しかったんだ」なんて言葉を密かに期待していたのに、あたしは少しがっかりした。

「それに、明日には忘れてるだろうし」

「…はっ！？」

あたしってそんなに頭悪そうに見えてるんだろうか。

「人間が鬼のことを知っても、その記憶は消えるようになってる」

ああ、そういうこと…

つまりあたしに秘密をばらしちゃっても明日にはきれいに忘れてるから、安心して話せるってわけ。

少しは心を開いてくれたのかと思ったのに。

「あー…そうなんだ。じゃああたしは明日の記憶喪失に備えてもう帰るから。バイバイ」

あたしはくると背を向けて、ものすごいスピードで歩き出した。これ以上話したって無駄だ。どうせ明日には覚えてないんだから…

「なあ」

あたしは振り返った。口びるをとがらせて、さぞ嫌な顔をしているに違いない。

「この盗み聞きしてるやつ、忘れてる」

そう言った彼の真上から、すうつと義将が姿を現した。

そしてすばやく彼と距離をとった。そばに寄るのも嫌らしい。

「いつからいなくなったたのよ……」

それを聞いた成神聡也の表情が少し緩んだ。

「幽霊で助かったな」

「お前に言われる筋合いねーんだよ」

義将は彼をにらみつけた。

「そうだな」

彼はそう言っで、あたしと反対向きに歩いていった。

第18話

『で、あいつは鬼だからオレにさわれたってわけだ?』

帰り道、義将が急につぶやいた。それまで無言だったのに、まるでずっと会話していたかのように。

あたしは放心していたので、何て言ったのかよくわからなかったけど適当に答えた。

「うん。そう」

『けっ、どつりで嫌なやつだと思ったなら化けもんか』

義将はぺつと唾でも吐き捨てるように言った。

「化けもんって…そんなじゃないでしょ、あの人」

『だってそうだろ。鬼つつたら妖怪だぞ?近付きたくもねーな』
そう言つてブルツと身震いした。

あたしには彼がそんな恐ろしいものには見えないけど。見た目はまるつきり人間だし。

それに、一応幽霊は信じてるけど(だって見えるし)妖怪は対象外。しかも鬼なんてものとなると、もはや未知の生命体だ。

『鬼とエイリアンならどちらを信じますか』と聞かれたら、間違いなくエイリアンを取る。

『ったく、おかしいなと言いやがる、あのスカした野郎…』

義将は一人でぶつぶつ言っている。

あたしは聞いているフリをしながら自分の考え事を続けた。

とりあえず、彼が鬼だったとしてもそれは特に問題じゃない。

あたしの実生活において、鬼のクラスメートの存在によって損なわれることなんて一つもないから。

依頼だって、彼が幽霊が見えるなら簡単に行きそうだし。

問題は、あたしの記憶が消えるってこと。こんな意味不明なことである？消えるようになってるって、どんなシステムになってるわけ。

そりゃあ、彼が軽々と嘘をつくような人だとは思わないけど、それにしてもばかげてるでしょ。

彼と今日話した内容を全て信じたわけじゃないけど、忘れたいとは思わない。

まったく、信じられない。勝手に人の記憶を消去するなんて。

とりあえず、そんな事態から、何とかして回避しなきゃ。メモに書いて残しておくっていう方法がある。

誰かに話しておくっていうのは？

だめ。たぶんその人の記憶も消えちゃうんだろうから。

「あつ、そうだ！あんたが覚えとけばいいんじゃない。一応『人間』ではないんだし」

『はあー？』

義将のぶつくさがやつと止まった。

「明日になったらあんたが鬼のことをあたしに教えるの。そうすれば…」

『お前なあ…忘れてるだけならともかく、記憶がすっかり消えてなくなってるやつに説明したって無駄だろ』

義将が珍しく正論を言った。意外と頭が回るやつなのかも。

「やっぱだめか…」

あたしはがつくりと肩を落とした。

じゃあ、メモに書き残すっていう手もボツね。

朝になって、自分が書いた意味不明なメモに悩まされるだけだろうから。

『まっ、あいつが言ったことなんか本当か怪しいし。明日になってみないとわからねーな』

「うん…」

本当にわけわかんない。今までの自分の常識を百としたら、軽く一万は超えてる。

なるべくこのことは考えないようにした方がいいかも。あたしの頭が爆発する前に。

何か手頃な話題はないかな。あつ、あつた。

「そついえば義将って、いつぬいぐるみから抜け出してたの？」

義将は思い出しているのだろう、しばらく考えこんでいた。するとだんだん妙な顔色になり、おかしい行動をとり始めた。話すだけなのにそんなに距離はいらぬはずでしょ。

『えーと、まああれだ。お前の上から鉄が落ちてくるのが見えただ、反射的に出ちゃった、みたいなの？』

義将は雰囲気と和ませるように、ははは…と苦笑した。

残念ながら効果はなかったみたいだけど。

「へえ…それであたしを見捨てて逃げたってわけ…」

義将の笑顔が引きつっていく。

『あーいや、やっぱさ、ああいうことになるのとよけたくなるだろう？幽霊だって』

「あんたは鉄骨が当たったって痛くもかゆくもないでしょ！！」

あたしの形相を見た途端、義将は逃げるように慌てて姿を消した。

「つたく…」

そうつぶやいたあと、気が付いた。

夜道に独りぼっちになってしまったことに。

そのあと、唯一の話し相手を無くしたあたしは一人で家まで歩いて帰った。いつも自転車に乗って行き帰りしてるから、歩くとなるとものすごくノロい感じ。

こんな帰り道、自転車ですれすれ走りすればすぐ着いちゃうのにな…

あたしの代わりに犠牲になった自転車のことを思うと何とも言えない気分になってくる。

あたしの学生生活に欠かせないお供だったのに。

中学生になって買ってもらった、かわいい赤色の自転車。

ちよっぴりパワフルな女の子のもとに買われたせいで、五年のうちにおんぼろ自転車に変わっちゃったけど。

おかげで、自転車屋さんには修理の技術が大きく身に着いたことだろう。

10回目くらいから、客があたしだとわかったとたん修理器具を持ち出してくるようになったから。

別に壊そうと思って乗ってるわけじゃない。こいでいたらたまたま岩や土手があっただけ。

家に帰った頃にはとつぷり日が暮れていた。

あたしは玄関の戸をガラガラと開けた。

「ただいまー…」

「おいっ！おじいちゃん、万夜が帰ってきた！」

「なにっ!？」

そんな声が聞こえたかと思うと、二人が奥から弾丸のようにすっ飛んできた。

圭太はあたしが立っているのを見るなり、おじいちゃんの肩をバシツと叩いた。

「ほら見るおじいちゃん！だから言っただろ？こいつが死ぬわけないって！」

「わ、わしは死ぬとは言つとらんぞ！」

おじいちゃんは叩かれた肩をさすりながら言った。

「…あのー、状況を聞きたいんだけど」

圭太が、聞いてくれよと言わんばかりにあたしの方を向いた。

「さつき学校から電話がかかってきて、おじいちゃんが取ったんだよ。何か工事現場で起こった事故に万夜が巻き込まれた、みたいなことらしくてさ。俺はありえないだろうって言ったんだけど、おじいちゃんがよく聞かずに電話切ったりするから…」

圭太はそう言いながら横目でおじいちゃんを見た。おじいちゃんは今にも聞こえていないような顔をしている。

何だかおかしいことになってるみたい。

心配してくれるのはいいとして、できれば勝手に殺さないでもらいたいんだけど。

「あのねー、確かに事故に遭いそうにはなったけど、見ての通りピンピンしてるから」

あたしは立ち上がって、かすり傷一つないことを二人に確認させた。するとおじいちゃんは、溜まったものを吐き出すように盛大なため息をついた。

「まったく、紛らわしいこと言いおって…騒いで損したじゃないか」

「そーそ。こんな悪運強そうなやつがそう簡単に死なないって」

二人はそんなことを言いながらさつさとキッチンに引き返して行った。

あたしはぼつーんと玄関に取り残された。

もう少し心配させとけばよかったかも。

夕ご飯を食べてお風呂に入って、ベッドに倒れこんだ。

今日はいろいろありすぎて、まだ頭がくらくらしている。

いろいろ考えようとする前に、眠りに引き込まれていった。

第19話

起きて、と声を掛けられた気がした。

つたく朝っぱらから…義将に決まってる。それにあいにくまだ起きる気分じゃない。

あたしはさつきより深く布団に潜り込んだ。だけど相手はちょっとばかり強引だった。

『起きてください』

その声と同時に、あたしの上半身は無理やり引っぱり起こされた。かなりランボウに。

「あー？もう、何よ…って寒っ！」

あつたかい布団は全部ひっぺがされていた。

ブルブル震えながら見てみると、ベッドの横に女の人がいる。

しかもそれは、この前依頼してきたあの幽霊だった。

『お久しぶりです』

女の人は前みたいに頭を下げた。

「はあ、どうも…」

あたしは顎をカチカチいわせながら、団子になっている布団を引っぱり上げた。

うーっ、寒い。

この部屋って、狭い上に空調設備までお粗末だから。

そんな部屋で少しでも寒さをしのぐには、二枚重ねのズボンに分厚いカーディガンでぶくぶくになって寝なくちゃいけない。

今のあたしはまさに雪だるま状態。

しかも、頭に手をやると今日もぐしゃぐしゃに寝癖がついている。

人が見たら、化学の実験で爆発でも起こしたか、はたまた嵐の中を走り回ってきたかっと思っちゃうくらいすごい。

だから毎日セツトするのも一苦勞だ。

相手が女性だからまだよかったとはいえ、こんな格好を人に見られるのは女の子としてちよつとまずい。

できればこんな朝早くからじゃなくて昼間に来て欲しかった。髪がセツトできて、ちゃんとした服を着てるときに。

女の人はあたしを見て、何か氣遣うような目付きをした。この格好を氣にしていると氣付いたのかも。

少しの間沈黙が流れた。何かしゃべったほうがいいのかな。

あたしはゴホンと咳払いした。

「…えーと、あなたの依頼のことなんですけど」女の人の表情は変わらず無表情だ。あんまり感情を顔に出さない人みたい。

どっかの秘書みたいにずっと敬語だし、氣難しい人なのかも。

なんかやりづらないな。こういう人って苦手だ。

「あなたが会いたがつてる彼って、幽霊が見えるみたいなんです。

なので、あのー、あなたのところに連れて来るっていうのがどういうことか、よくわからないんですけど、すぐに会わせられると思います。急ぐなら今日にでも」

『実はそのことです』

女の人は視線を落とした。なんか、妙な予感。

『あの男に会いたがつているのは私ではなく、私の知り合いなんです』

はい？

「それで？」

『あの男がどのような男か、ごらんになったでしょう』

「はあ、そりゃまあ一応」

嫌というほど。

『あれは用心深い生き物です。人間と関わりを持とうとしません。ことに、知り合いとは面識がありませんので、警戒して会おうとし

ないでしょう。なので、あの男が言うことを聞くような人間が必要だったんです』

「…で、その役があたしってわけですか」
女の人はずなづいた。

何だか複雑なことになってきたかも。

つまり仲良くなれってというのは、彼から警戒されないようになれってことだったらしい。

あんな妙な言い方せずに、初めからそう言ってくればよかったのに。

だけど彼の警戒を解くなんて無謀なこと、何十年かかるか知れない。あたしはできるだけ悩ましげな顔で言った。

「あのー。言つときますけど、あたしは彼と会って数日しか経ってないんです。心を開くような仲になるにはすぐおーく時間がかかると思いますけど…」

『かまいません』

もう、ちよつとは考え直してくれると思ったのに。

『それに、あなたでないとはいけませんから』

え？

「あの、それってどういう…」 『では』

女の人あたしを遮って、消えてしまった。

空っぽの部屋に、時計の音だけが響く。

ったく。なんでこう、人が質問したいときに限って消えちゃうわけ？

そして結局、この意味不明な依頼は続行するみたい。

第20話：消えてない

ケータイの時計は8時28分を指している。

学校が始まるのは30分。そして、こんなに一生懸命歩いてるのにまだ学校は見えてこない。

完璧ムリでしょ、これ。

急いだところで、汗でベトベトになって教室に入るハメになるだけだ。

あたしは無駄な抵抗はやめて、潔く遅刻していくことにした。

はあーっ、疲れた。息が苦しい。

早歩きで息切れなんて、体育のゴリが聞いたらきつと号泣するだろう。自分が体育向きじゃないってことくらいよくわかってる。

一応頭はそこそいいほうだけど、でも運動に関してはからっきしダメ。

50メートル走はみんなの100メートルと同タイム、ペアでキャッチボールをすれば友達の頭に飛んでいく。

なのであたしはなるべくスポーツと関わらないようにしてる。

これ以上担架を出動させないためにも。

あたしはケータイをつつきながらゆっくり歩いていくことにした。

ウサギのぬいぐるみは、うんともすんともしゃべらない。

最近義将はふらつといなくなるようになったからだ。

義将のことだから、どっかその辺でもうろついてるんだろう。

ほんつとに、自分から行きたいって言い出したくせにお気楽なんだから。

まあ、おかげであたしは今日一日気兼ねなく生活できる。体育の着替えのときケータイをカバンに置いていなくてもいい。

通りには学生服の姿なんて一つもなかった。
あたしは本格的に遅刻してるらしい。

ぶらぶら歩いていくと、少し先の曲がり角から男の子が歩いてくるのが見えた。しかも、うちの高校の制服を着ている。
まさかあたし以外にも遅刻者がいるなんて。

でも、あいさつしちゃうなんてことは思わない。
背も高いし茶髪だし、派手な先輩かもしれないから。そういう先輩って二ガテ。

だけどこのまま行くと、交差点で接触しなくちゃいけない。
あたしは迷ったけど追い抜くことにした。

目を合わせないように、下を向いて。もうちょっと…

「あれ、君…」

え？あたし？

しかもこの声には聞き覚えがある。

「ああやっぱり。この前の子か」

顔を上げてみると…げっ！

うっかり口から悲鳴が出そうになった。

あたしと目が合うと、『ナルシスト』はホストみたいに華やかな笑みを浮かべた。

今にもバラがこっちに降りかかってきそう。

「あ、どうも…」

あっちゃー、ついてない。

相手はそんなあたしを見下ろして言った。

「そういえば、まだ名前聞いてなかったよね」

「あ、朝日奈万夜…です」

「僕は高槻千尋。ちなみに3組」

「えっ同級だったんですか？」

相手は、にこりと優雅な笑みを浮かべた。揺れたピアスの銀色がきらりと光った。

「そ。だから敬語はナシね」

びつくり…てつきり先輩かと思ってた。

制服じゃなかったら大学生に見えたかもしれない。

でも良かった。麻海に報告するネタができたし。『高槻千尋』ね。

それにしてもこの人、何食べて生きてるんだってくらい華やかなオーラを発してる。

コーンと竹輪入りの味噌汁は食べてないってことは確かだ。

あたしみたいな一般庶民と立っていると、まるで雑種とドーベルマンを並べたように見えるに違いない。

しかも雑種のほうはヘアスタイルが相当崩れている。

あたしは何か身体がぞわぞわしてくるのを感じた。

別に彼の高級感におじけづいたわけじゃない。

そばを通り過ぎていく女の人が、みんな彼のことをちらちら見ているからだ。それも、目をハートにして。

うげーっ、自分じゃないとはいえ、こんな熱い視線が飛び交う中にいたら窒息死しそう。

あたしは手早く話を終わらせて、ここから脱出しようと思った。思ったのだけれど…

「ねえ、よかつたら一緒に学校まで行かない？」

「え…？」

不運なことに、彼のほうが先手だった。

とっても嬉しいお誘いだけど、なんていうか、正直言って、行きた

くない。

今日初めて名前を知ったような人と何を会話すればいいのよ？
こういうのは、遠慮するに限る。

「あー、でもほら、高槻くんは急がなきゃいけないんじゃない？こんな時間だしー」

彼はぽかんとした顔をした。

「それはお互い様でしょ」

「うっ」

ま、負けた…

そのあと、あたしたちは学校までの長い道りを歩いた。

意外とこの人と会話するのはラクだった。自分で勝手にしゃべってくれるから。

彼がテストの成績とか嫌いな先生の話をするのを、あたしは「うん」「へえーそうなんだ」を呪文のように繰り返しながら聞いた。

彼の長い足には、あたしのスピードは少々遅いらしい。すごくゆっくりと歩いて、あたしに合わせてくれている。

こんな派手な見た目ののに、けっこう紳士なのかも。

「　　そういえばさ」

「うん」

ああ、もう三百回目くらいの「うん」だ。

「万夜ちゃんのクラスって、この前転校生来たんでしょ？」

「あー、うん、来たよ」

万夜ちゃんなんて呼ばれたことにぞわつとしながら答えた。

「うちのクラスでも女子が騒いでたよ。すごくかっこいいらしいね」

「そう、だと思うけど」

「でもまあ、そういうやつに限って心は鬼のようになさんだりするけどね」

あー、ホントそれ。鬼のようっていうか、実際鬼だし。

そう、本物の…鬼…？

第21話

あたし…覚えてる。彼が鬼だって覚えてる！

「あ、学校着いたね」

高槻くんの声で、現実に取り戻された。

さて、どうしよう。とりあえず確かなのは、のんきにこの人と歩いている場合じゃないってことだ。

「ごめん、あたし用事思い出した」

「え？」

高槻くんはきよとした顔をした。

「大っ事な用事だから、先行くね。ホントごめん！」

よし、これだけ謝つとけば十分。あたしは返事も聞かずに駆け出した。

彼が屋上にいるってことはわかっていた。1時間目はいつもさぼってるから。

自分にもうちよつと体力があつたらこんな階段ささと上れるんだけど、残念ながらすでにヘロヘロだった。ほんつとに、彼と関わってからロクなことがない。

事故には巻き込まれ、自転車はペしゃんにされ、こんなに走らせれ。

あたしは手すりにかじりついて階段を上った。

なんとしても、取っ捕まえてあの冗談としか思えない言葉の真相を聞かなきゃ気がすまない。

実際、冗談だったわけだけど。

屋上のドアを勢いよく開けると、フェンスにもたれて座っていた成

神聡也が振り向いた。

あたしを見て、あからさまに嫌そうな顔をした。そりゃあ汗だくの女の子がぜいぜい言いながら立ってたら、そうしたくなるのもトーゼン。

「…またあんたか」

もうウンザリってカンジの言い方だ。

「あんたもずいぶん物好きだな。授業中にこんなところ来てていいのか？」

お互い様でしょ、と言ってやろうかと思っただけど、高槻くんとおんなじセリフだと気付いてやめておいた。

「あのねー、あたしはあんたと違って、用があるから来たの」

あたしはそう言いながら、髪の毛を直した。

「さっさと済ましてくれないか」

はいはい。言われなくとも。

「昨日のことなんだけど」

彼は眉をひそめただけで、表情一つ崩さなかった。

「何の話？」

あたしが忘れてると思って完全にしらばっくれている。

思わず飛んでいきそうになったこぶしをなだめて、あたしはこぼんと咳払いした。

「ほらー、あたしを助けてくれたあと、いろいろ話したじゃない。覚えてるでしょ？」

「…さあな」

「だから！自分は鬼だって、そう言ったでしょ！」

おっと。思わず口を押さえたけど、遅かった。

彼の表情は凍りついていた。

そして次の瞬間には、彼はあたしの目の前にいた。まるでテレビのチャンネルでもぱちつと切り替えたみたいに、一瞬のうちに。

あろうことか、彼はいきなりあたしの襟首をがっと思いで引っ張り

上げた。

氷みたいにひんやりした手が首筋に触れ、びくつと体が震えた。

「なんで…消えてない？」

この世の終わりにみたいにつぶやいた。

「あ、あたしだって知らない」

舌がもつれて「あらしだってしあない」みたいな言い方になってしまった。

彼はカッターシャツの襟を、ぐしゃぐしゃになるほど強く握り締めていたけど、義将の時みたいに締め上げはしなかった。

なぜ息苦しいかというと、あたしがドキドキしてるせいだ。

だって、彼の顔がちよつと背伸びすればキスできるくらい近くにあったから。

このままキスしてくればいいのに、なんて思ってしまった自分に、顔が真っ赤になった。

でも彼のほうは逆だった。白い肌は青ざめている。

「まさか、こんなことあるわけがない…本当に人間なのか？」

「人間に決まってるでしょ！」

頭が変だっと思われたことはあるけど（空気に向かって話しかけているのを目撃されたせい）、人間かどうか疑われたのは初めてだ。

彼はありえない…とつぶやきながら呆然としている。

「あのー…出来れば放してくれない？」

彼は、ああ…と青い顔で手を放した。きれいにアイロンをかけたはずのカッターシャツはしわくちゃになっていた。

成神聡也は額に手を当てて険しい顔をしている。かなり動揺してるみたいだ。

その証拠に、さっきもあたしの目の前で「身体能力」を披露しちゃ

つたし。

「まあ、そんなに気を落とさないでよ。誰にも言わないから」
成神くんって鬼なんだって、なんて言っても信じてくれる人はいないだろう。

「あなたには悪いが…」

彼は額から手を離れた。瞳はいつもの鋭さを取り戻していた。

「記憶が消滅していない以上、消えてもらう」

第22話

一瞬耳を疑った。

あまりにサラツと

「消えてもらう」なんて言われたからだ。

「あゝあはは、またそんなこと言っちゃって」

「本気だから」

「え？」

「これは人間が知っていいことじゃない。生かしておくわけにはいかない」

そう言くと、彼はおもむろに袖をまくり上げた。

彼の手首には、なんの装飾もないツルリとした腕輪がはめられていた。見たこともないような黒い金属でできているそれは、日の光で赤黒く光っている。彼が少し動かすと、カチツという音とともにはずれ落ちた。

しかし、腕輪は地面に跳ね返ってくるくる回ったりしなかった。ドスツとコンクリートに深くめり込んだのだ。

それだけでも心臓が飛び出しそうだったのに、次の一瞬で完全に停止した。

それは腕輪を外した彼の手を見たからだった。

人間の手ではなくなっていた。

指先にはヒグマも真つ青の鋭い爪がある。

皮膚はさっきの腕輪のように赤黒く、鋼鉄のように堅そうだ。ナイフを突き立てたつてびくともしないだろう。

まるでモンスターの手。

「その爪で殺す気…？」

「痛みは感じない。魂を浄化するだけだ」

「そしたらどうなるの？」

「体は何日か呼吸するが、やがて死ぬだろうな。肉体は魂なしでは生きられないから」

「淡々とした言い方が余計にあたしをぞわぞわさせた。」

「こんなことは例外だが、仕方ない」

彼はそう言っ、軽く一歩踏み出した。

後ずさりしようとしたけど、膝がガクガクして動けない。

「ま、待つてよ！他に方法考えない？」

「何で？これが一番手っ取り早く処理できる」

これがこれから人殺しするって時に言うセリフだろうか？体だけじゃなく頭もどうかしちゃってるのかも。

「だからって、殺せばいいってもんじゃないでしょ？あたしは死ぬわけにはいかないの」

「なぜ」

「家族や親友がいるからよ」

成神聡也の顔に不思議な表情が浮かんだ。

驚いているとも訝しげにも見える顔だ。

「家族…」

「そう。もしあなたが死んだら、家族や友だちが悲しむでしょ？」

「…わからない」

「？」

「俺にはいないから」

しばらく沈黙が流れた。なんだかしんみりした空気に何も言えなかったから。

すると彼がずっと背を向け、かがんで腕輪を拾い上げた。腕につけて向き直ったときには、人間の手に戻っていた。

「…？」

「今日のところはやめておく」

そう言っで、彼はあたしの横をスタスタ通り過ぎた。

「他の人間に秘密が漏れる心配もないしな」

「それ、ホントだったんだ……」

つぶやくと肩越しににらまれたので、あたしは口をつぐんだ。

「言っとくが、保留にしたらだからな」

彼はそう言っで、屋上から出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2633d/>

あたしと鬼と幽霊と

2011年1月28日10時22分発行